



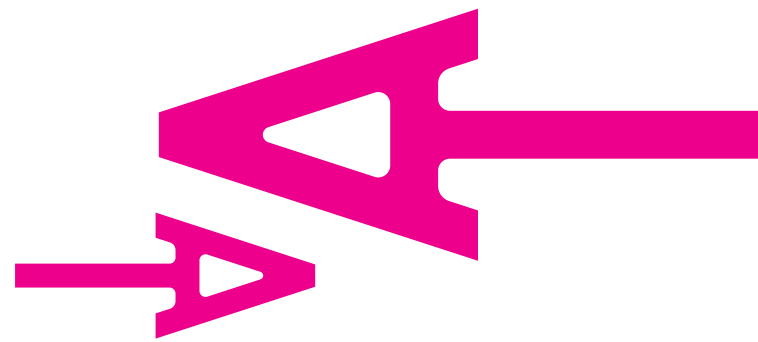
あいちトリエンナーレ2010 ダイジェスト

AICHI TRIENNALE 2010 DIGEST



572,023人が 祝福した新たな船出

2013年、未来をその手に……



アートこそが未来を拓く

2010年8～10月、「**あいちトリエンナーレ2010**」が開催された。

トリエンナーレとは、“3年に一度行われる現代アートの国際芸術祭”であり、

世界への発信力をもって創造性を大きく刺激するビッグイベント。

世界131組のアーティストが参加したこのトリエンナーレは、

現代美術に加えてパフォーマンス・アーツや映像プログラムなども含み、

国内外で類を見ない規模の芸術祭として大成功!

実に**57万2千人の観客が来場**して、最先端アートの数々に興奮&歓喜した。

その**経済効果は約78億円**。パブリシティ効果も**47億円以上**にのぼった。

また、アンケートの集計によれば、**77%もの観客が「また来たい」と回答**。

さらに、中学生以下の**子どもたちにいたってはその回答が82%にのぼり**、

次回の開催を楽しみにしている。

世界中からアーティストが集まり、ある者は愛知に滞在して作品を制作。

彼らのアートが、愛知から世界に発信される。

また、トリエンナーレがもたらすクリエイティブな人材の集積・知の集積は、

愛知の文化力を飛躍的に高め、産業力・経済力を含めたこの地域の成長、

ひいては、**日本を牽引し、世界と闘える地域づくりに寄与**していく。

モノづくり大国・愛知が本気で仕掛けたプロジェクト。今こそ、アートが未来を切り拓く。

表紙：草間彌生《命の足跡》と名古屋テレビ塔、オアシス21



草間彌生《真夜中に咲く花》
撮影：怡士鉄夫



あいちトリエンナーレ2010 ダイジェスト

AICHI TRIENNALE 2010 DIGEST

Contents

- 06 テクノロジーを刺激するアート
- 08 デザイン&ファッションの源泉
- 10 愛知とアートがとけ合う風景
- 12 傍観してられない!!
- 14 ジャンルを越えて、国境を越えて
- 16 チイキ×チイク
- 18 愛知に広がるアートの波、人の波
- 20 572,023人からの喝采
- 21 メディアが追い掛けたトリエンナーレ旋風
- 22 主要データ一覧



あいちトリエンナーレ2010 都市の祝祭

テーマ：都市の祝祭 Arts and Cities

会期：2010年8月21日～10月31日(72日間)

会場：愛知芸術文化センター／名古屋市美術館／長者町会場
納屋橋会場／名古屋城／オアシス21／中央広小路ビル
七ツ寺共同スタジオ／他

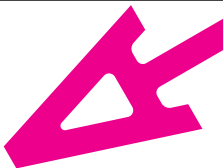
芸術監督：建畠 哲(国立国際美術館館長)

(※2011年1月から京都市立芸術大学学長)

主催：あいちトリエンナーレ実行委員会、愛知芸術文化センター、
名古屋市美術館



池田亮司《Spectra[nagoya]》と名古屋城



テクノロジーを 刺激するアート

あいちトリエンナーレを支えるキーワードのひとつ「最先端」には、「美術を中心とした現代芸術の動向を国際的な視野に立って紹介すること」という狙いがある。そこで記念すべき第1回開催のオープニングには、テクノロジーとアートのコラボレーションしたロボット演劇が登場した。現代アートの最前衛を走る劇作家・演出家の平田オリザと、知能ロボット研究の世界的第一人者である石黒浩が中心となって制作したロボット版《森の奥》は、大阪大学の正式な研究で、

本格的に劇場公開されるのは今回が世界初。そのため各方面から注目が集まり、事前の問合せも多かったが、幕が上がるのとさらに大反響。4日間6回しかない公演には、当日券を求めた人で長蛇の列ができた。特に、普段はあまり劇場文化になじみのない男性客も多数観劇。飛躍した視点に立ったアートの発想が科学の先端技術開発を後押ししている実態に驚き、終演後に開かれた制作者たちの座談会などにも熱心に耳を傾ける姿が見受けられた。



平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学) ロボット版《森の奥》 撮影：南部辰雄



ロボット版《森の奥》終演後の座談会より 撮影：南部辰雄



平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学) ロボット版《森の奥》 撮影：南部辰雄

舞台は、中央アフリカにある研究室。そこでは類人猿ボノボを飼育しながら、サルと人間の違いについて、ロボットと人間が共同で研究を進めている。やがて(人間/サル/ロボット)の立場から、命の危うい境界線が……。精巧な動きと卓越した台詞によって、観客はロボットの演技に“感心”ではなく“感動”!!



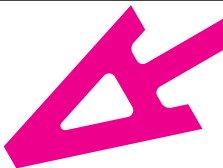
平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学&ATR知能ロボティクス研究所) アンドロイド演劇《さようなら》 撮影：南部辰雄

ロボット演劇の好評を受け、急ぎよ公演が決まったアンドロイド演劇も大反響。大阪大学とATR知能ロボティクス研究所が開発・発表したばかりの人型ロボット(ジェミノイドF)は、人間の声や表情をリアルに再現する世界最先端ロボットとして、生きた役者を相手に二人芝居を展開した。

劇作・演出の平田オリザ、テクニカルアドバイザーを務める大阪大学教授・石黒浩、この研究の仕掛け人である大阪大学総長・鷲田清一、実際にロボットを監督する(株)イーガールの代表・黒木一成。制作に携わる人々が一堂に会した終演後のトークイベントは、劇本番に勝るとも劣らぬ熱気!? 新しいモノを生み

出すにはまず飛躍した芸術的発想が必要で、その後に一般化・商品化の道があることや、世界と向き合える人材育成の重要性などが語られた。内閣官房参与でもある平田は現実に、この舞台を世界各国にセールスする意気込み。





デザイン& ファッションの源泉

主要会場を結ぶ移動手段としても街ゆく人の目を奪った《草間の水玉プリウス》。これは、あいちトリエンナーレ2010のシンボリックな存在であり、日本を代表する前衛芸術家・草間彌生のデザインしたものだ。この自動車には、利便性と作品性の両面で観客が集まり、混雑時には乗車待ちの人々が列をなした。いまやインダストリアル・デザインの領域も先鋭化。そこに現代アートの影響、進出は明らかで、実際、草間は携帯電話のデザインなども手掛

けている。衣服や装飾品に限らず、日用品、家電、自動車、建造物にいたるまで、現代においてデザイン性、ファッション性は、産業に欠かすことのできない要素。そして、そのアイデアの源泉として、斬新で大胆なアートの感覚が必要となってきた。情報社会の中で敏感になった消費者のニーズに応えるヒントは、アートの中にこそ隠れているのだ。



草間彌生《草間の水玉プリウス》 撮影：福永一夫



ピップ&ポップ《ハッピー・スカイ・ドリーム》 撮影：福永一夫

オーストラリアの女性ふたり組・ピップ&ポップによる作品は、見るからに色彩鮮やかでキュート! しかし《ハッピー・スカイ・ドリーム》は意外にも、アイヌ民話や七福神などがモチーフになっている。八百万の神が住むユートピアの表現も、アーティストの手にかかるとファンタジーの世界に!!



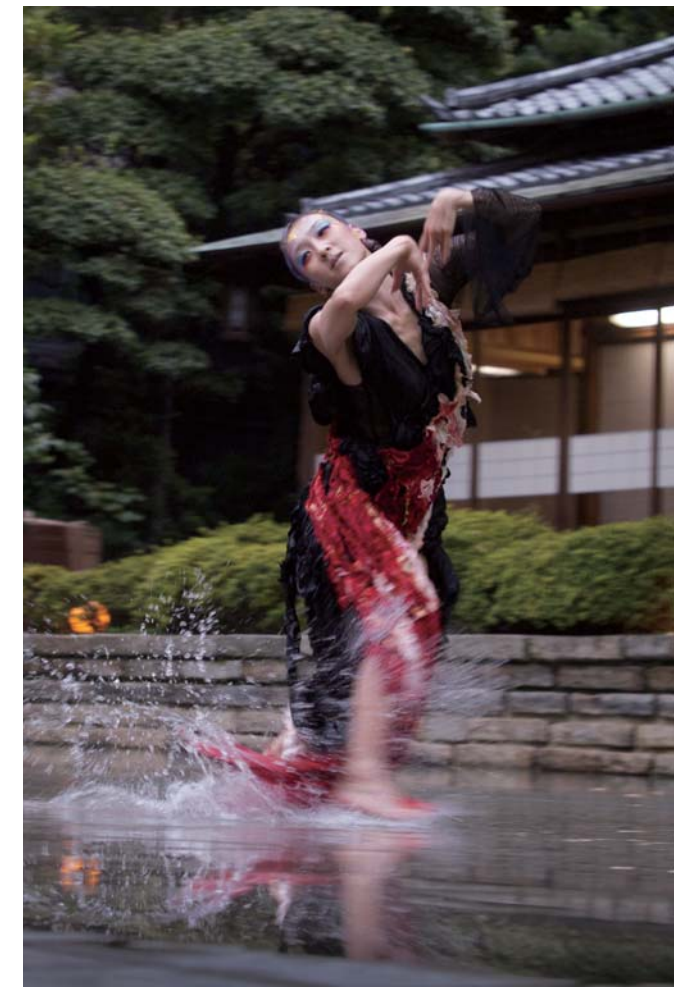
ルシア・コッホ《Sombrinha》

空間とのやりとりをコンセプトとするルシア・コッホは、長者町織維問屋街へとアプローチ。店先のバックライトパネルやカーテン、さらには傘といった街を歩く人の持ち物にまで自身の作品性を広げていった。色のグラデーションは街へと介入していくコッホの意識を反映しているが、その意図を知らずとも、美しいデザインとして機能している。



デルガド・フッシュ《桃色のズボンと赤いヌバックの先の尖ったハイヒールをはいて、襟ぐりが緩んだセーターの上に着た空色のウールのロングコート》 撮影：南部辰雄

あいちトリエンナーレを機に初来日を果たしたデルガド・フッシュは、スイスで結成されたダンスユニット。経歴は大きく異なれど、鍛え上げられた身体を持つふたりは、その魅力を思う存分に発揮。長い手足の映える衣裳をまわって、真の美とは何かをも問いかけた。



平山素子《Carp with wings, me》 撮影：羽鳥直志

創業400年を誇る名古屋きつての老舗料亭・河文の中庭をステージに、名古屋出身の舞姫・平山が鯉の化身となって降臨。着物にも似た衣裳や、化粧品メーカー研究所の協力を得たメイクでも斬新な美の追求を試みた。



愛知とアートが とけ合う風景



長者町あびす祭りで曳かれるKOSUGE1-16の《長者町山車プロジェクト:かたい山車、長者町通》 撮影：石田亮介

〈祝祭性〉をキーワードに「都市の祝祭として高揚感を演出すること」も、あいちトリエンナーレが目指したところ。主要会場だけでなく街のあちこちに出没&多発する斬新なアートは、見慣れた風景に発見を与えてくれた。KOSUGE1-16(こすげいちのじゅうろく)は、1年前のプレイベント段階から長者町会場の織維問屋街とコラボレーション。街から提供された布や綿などを使って、子どもが曳くための《やわらかい山車》を制作した。続く本祭では大掛かりな《かたい山車》を発表。これはアーケードをくぐるため伸縮構造になっていたり、自転車を漕ぐと飾りの“からくり”が動いたり、街や人と一体になることで作品の面白さが伝わる趣向になっていた。

そもそも戦争で消失した山車を街と協力して再生させるプロジェクトであり、からくりの物語も長者町最盛期を支えた人々を題材にしている。長者町恒例の「あびす祭り」では街の人々が写真のとおりに山車を曳いて練り歩き、熱気あふれる祭の中で大衆と芸術それぞれのエネルギーがとけ合った。アートは街や人の潜在能力を開花させていく。そしてアートと街とが自然に一体化できる愛知だからこそ、アートを普段の生活にとけ込ませることができるのだ。



池田亮司《spectra[nagoya]》

普段は閉館時間の名古屋城に大勢が押し寄せ、音と光の作品に興奮した2日間。知らなかった人たちが、名古屋の真ん中に浮かび上がる不思議な光のタワーに驚かされた。地上から成層圏までを貫く強い光線は、なんと長野県の王滝村からも目撃できるほどだったという。アートの光を通して、近くに居合わせた人も遠く離れた地の人も共鳴した稀有な体験。



ボリス・シャルマツ《Quintette Cercle》、名城公園 撮影：尾崎聡

フランスから来たボリス・シャルマツのカンパニーは、名城公園で実験的ダンスを披露。ある種の構築されたダンス世界と公園の自然とが同居する奇妙な空間を創造した。



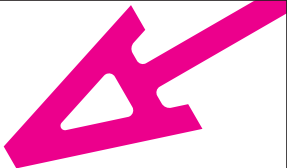
スティーヴン・コーヘン
《彷徨えるユダヤ人 杉原千叟の崇高なる記憶に捧ぐ》、名古屋駅周辺
撮影：マリアンネ・グリーペール

南アフリカ共和国出身の白人で、ユダヤ人、ホモセクシャルという複雑なアイデンティティを抱えたコーヘンは、世界各地の公共スペースで独自のパフォーマンスを展開。愛知にも奇抜なスタイルで出現、街の空気を一変させた。



西野達《転がる愛知》 撮影：福岡栄

伏見オフィス街の中空にポカんと吊るされた作品。ネオンの看板を見慣れた人々も、何の広告かわからない不可解さにかえって興味津々。携帯電話で撮影&メールする人が後を絶たなかった。



傍観して いられない!!

アートは時として、鑑賞しているだけでは済まない、済ませないエネルギーをもって観る者へと迫り、その核心へと巻き込んでいく。中国福建省生まれ、ニューヨーク在住の蔡國強(ツイ・グオチャン)は、2008年・北京オリンピックのビジュアル・ディレクターとしてスペクタクルな花火の演出を手掛けた奇才。火薬を使って絵を描く彼は今回、名古屋芸術大学の体育館で学生たちの協力も得て作品を制作。展示会場では、完成した壮大な絵画と

もに、その制作模様を収めた映像も上映した。参加した学生にとっては、世界的アーティストの息吹を間近で感じながら、ともに作品を生み出す喜びも得られた貴重な体験。このように、あいちトリエンナーレでは表現者と鑑賞者の垣根を超えた出品も多く、“体感型”や“参加型”の企画を積極的に展開。アートも距離をとって傍観するばかりではなく、時には内側へと巻き込まれたり、主体的に飛び込んでみることで、もっと直感的に本質がわかることだってあるはずなのだ。



名古屋芸術大学の学生たちとの共同作業による、蔡國強(ツイ・グオチャン)《美人魚 あいちトリエンナーレのためのプロジェクト》制作風景



まことクラブ《長者町織維街の日常》 撮影：丸山武久

まことクラブは既成の発表スペースを飛び出してダンス公演を行ってきたユニークなカンパニーだ。今回は愛知芸術文化センター地下2階にある吹き抜けのロビーから始まって、長者町・丹羽幸株式会社の荷さばき場へと移動。同社の従業員も出演することで作品の一部となり、ユーモラスで奇妙な余韻が残るパフォーマンスを一緒に繰り広げた。



高嶺格《いかに考えないか?》

劇場で、数人のパフォーマンスを舞台上げて行われたインスタレーション作品。鑑賞者はタッチパネルを使って指示を出すことができ、それにパフォーマンスは即興で応える。ただし、舞台と客席の間には白い布がはられているため、パフォーマンスを直接観ることはできないあたりがシニカル。一見親しみやすいが、根底には他者との関係や相互理解というシリアスな問題が横たわる。



山川冬樹《ニューモニア》 撮影：栗津一郎

こちらは参加型。肺炎を意味する《ニューモニア》と題された新作は、人間の呼吸や声がモチーフになっているため、風船の中に息を提供してくれる人を募集。作品の一部と化した自身の息入り風船を見て、提供者たちはどんな想いを抱いただろう。



オープンリールアンサンブル

今では懐かしいオープンリール式のテープレコーダーを楽器に改造して、視覚的にも楽しめる演奏を聴かせてくれた若き集団。長者町の旧荷さばき場がクラブさながらの音楽空間に姿を変え、音に反応して集まった聴衆も思い思いに身体を揺らした。

ジャンルを越えて、 国境を越えて



あいちトリエンナーレ2010 プロデュースオペラ《ホフマン物語》 撮影：中川幸作



アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル+ジェローム・ベル+アンサンブル・イクトゥス《3Abschiedドライアップシート(3つの別れ)》 撮影：南部辰雄



ヤン・ファール《Another Sleepy Dusty Delta Day ~またもけだるい灰色のデルタデー》 撮影：南部辰雄

ベルギーのヤン・ファールは演出家、振付家、作家、美術家としてマルチに活動する現代アートの鬼才。この舞台でも、ひとりの女性パフォーマーによる手紙の朗読、歌、ダンスに加え、象徴的な美術が渾然一体となって提示された。



ニブロール《THIS IS WEATHER NEWS》 撮影：南部辰雄

ダンサー・振付家の矢内原美邦を中心に、映像作家、音楽家、衣装デザイナー、ジャーナリストという多彩な顔ぶれが、対等な立場で舞台を作り上げるニブロール。「未来」をモチーフにした新作は、いつにも増してどの要素もエッジが鋭く、また意味深長。観る者は表現の渦へと引き込まれる興奮と衝撃を覚え、思わず身を震わせた。



西京人《第2章 ここは西京/旅路は彼方の世界へ》(あいちヴァージョン) 撮影：怡士鉄夫

目抜き場所、愛知芸術文化センター地下2階の吹き抜けスペースに陣取った西京人の作品。日中韓のアーティスト3人が結成したこのグループは、北京でも南京でも東京でもない架空の都市国家「西京」の住人というコンセプトで結成。アートの力で複雑な歴史的背景を乗り越え、創作を共にしている。

「現代美術を基軸にパフォーマンス・アートも積極的に取り込むこと」。あいちトリエンナーレでは舞台作品も取り上げ、アートの〈複合性〉を追求した。近年、各地の芸術祭でパフォーマンス・アートを見かけることは増えたが、これほど本格的にラインアップされたものは海外でもめずらしい。グランド・フィナーレにはダンスと演劇と現代音楽が絡み合う実験的な作品《3Abschiedドライアップシート(3つの別れ)》を上演。大ホール公演でありながら、観客との対話を含む先の読めない果敢な試みは刺激的だった。さらに、国境を越えたプロジェクトも目立ち、中でも愛知県文化振興事業団が中心となってプロデュースしたオペラ《ホフマン物語》は出色。海外から愛知に指揮者や歌手を招いたこのグランド・オペラは、決定稿が存在しないこともあっ

て“あいち版”と呼べる斬新な演出に！本作あいち版は批評家からも高く評価され、東欧・スロベニアでの再演まで決定している。それらの結果、観客層にも変化が起こり、例えば美術ファンがトリエンナーレ以降も劇場へ足を運ぶようになるなど、鑑賞者の垣根も取り払われてきたから嬉しい。また、現代美術の国際展には約20カ国からアーティストが参加。多くの海外アーティストが作品を制作するために愛知へとやってきた。その現場では、一般の若者たちがアーティストを手伝ったり、反対にアーティストが交流パーティーで自国の料理をふるまうといった機会も。同時代を生きるアーティストによる現代アートの芸術祭だからこそ、言葉や文化を越えて人と人が交流できることを肌身で感じられた。



チイキ×チイク

何に対しても好奇心が旺盛な子どもたちは、未知のアートに対しても真正面から向き合い、その感性を急成長させていく。地域を挙げた国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」は、気鋭のアーティストと子どもたちが直接交流できる「キッズトリエンナーレ」や、世界の優れた芸術作品を直に鑑賞できる「学校向け教育プログラム」など、この地域の子どもたちのリアルな芸術体験をサポートし、知育面で貢献。豊かな発想力を備えた

人材の育成は、子どもの段階だからこそ肝心だ。トリエンナーレでの貴重な経験は、アートの分野だけでなく、他の様々な分野のクリエイティブな人材の育成につながっていく。また、他者と共に何かを鑑賞することも、社会性を育てる重要な手立て。まして、それが自分たちの生活の身近で展開されれば、子どもたちはいっそう親しみをもってアートに近づいていくことができる。未来を担う子どもたちの可能性は、アートの世界と同様、無限に広がっているはずなのだ。



キッズトリエンナーレの模様



島袋道浩(Shimabuku)のワークショップ風景

“しまぶく”こと島袋道浩は普及・教育事業の一環で篠島の小学校と中学校をそれぞれ訪れ、ワークショップを開催。小学校では4年生17人を、中学校では2年生21人を相手に、篠島について考えたり、創作を手ほどきしたりした。この事業には他5組のアーティストが参加。飛鳥村や東栄町などでもワークショップが行われた。



山本高之《どうぶつたちの一週間》

ご当地・愛知出身の山本は、動物を題材にしてロシア民謡「一週間」の替え歌を子どもたちにリクエスト。作詞した子どもには、それぞれの動物の前で歌ってもらった。子どもの視点を通して大人社会を鋭く斬るシニカルな作品。



野村誠《プールの音楽会》 撮影：上田和剛

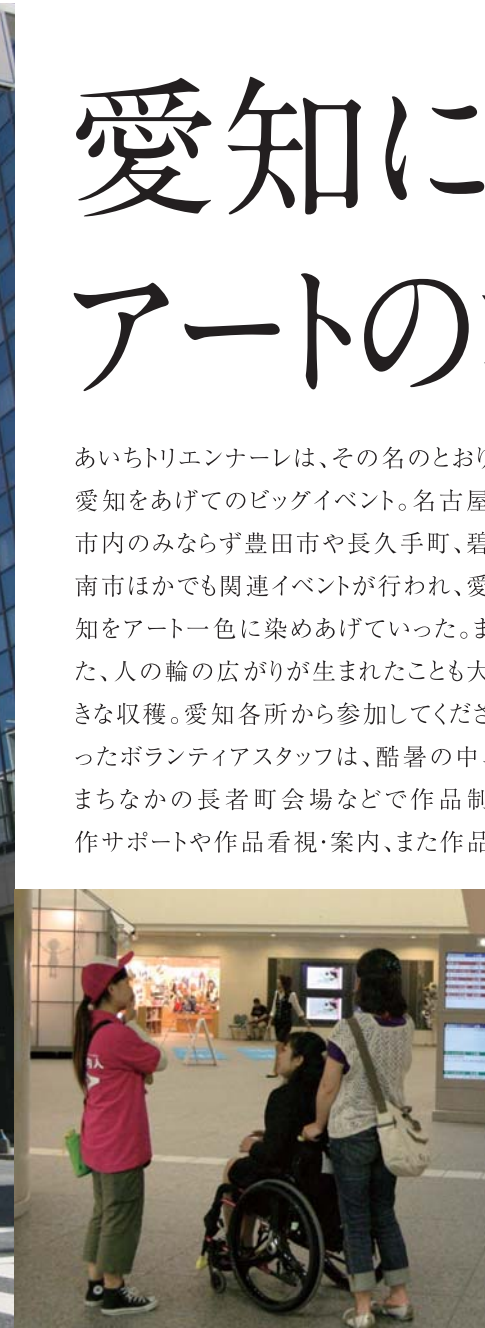
愛知生まれ、京都在住の現代音楽家・野村誠は名古屋市立富士中学校の屋外プールで演奏会を。炎天下にも関わらず小さな子ども連れの観客も。まだ言葉が話せない乳児がユーモラスな音楽にのせられ、自然と身体を揺らす姿も印象に残った。



学校団体向け鑑賞プログラムに参加した生徒たちの模様

まとまって現代アートに触れられる絶好の機会だけに、学校を対象とした団体鑑賞プログラムも実施。愛知芸術文化センターや名古屋市美術館において、スタッフがトリエンナーレの見どころや現代アートの楽しみ方を解説。その後、児童・生徒たちは思い思いに鑑賞を楽しんだ。なお、先行して教員向けの説明会も行い、教育現場との連携を図った。

愛知に広がる アートの波、人の波



あいちトリエンナーレは、その名のとおり愛知をあげてのビッグイベント。名古屋市のみならず豊田市や長久手町、碧南市ほかでも関連イベントが行われ、愛知をアート一色に染めあげていった。また、人の輪の広がりが生まれたことも大きな収穫。愛知各所から参加して下さったボランティアスタッフは、酷暑の中、まちなかの長者町会場などで作品制作サポートや作品看視・案内、また作品

解説などに大活躍。心尽くしの接客が、多くの来場者に好感を与えた。他にも、サポーターズクラブが自主イベントを次々と開催。より多くの人々が現代アートを親しみやすく楽しく観るためのアイデアを積極的に考えたり、地域住民との交流の場をもうけたりした。それに対して住民側からも「商業的な損得ではない、美術、芸術、パフォーマンスの価値で、街とのシナジー効果がアップした」という声がかかれたことは、次回への追い風だ。そうしたアーティストと鑑賞者の間に立つ支援者たちの存在こそ、トリエンナーレを成功に導いたとって過言でない。そして、すでに第2回開催に向けて動き出している人々も……。あいちトリエンナーレは、あらゆる人の参画を待っている!!



残暑厳しい名古屋の街角で道案内役に励むボランティア・スタッフ



不思議なルックス&パフォーマンスで耳目を集めたPRパフォーマンス隊
PRパフォーマンス隊は神出鬼没!? 開幕に先駆けて、不思議なルックス&奇妙な動きでトリエンナーレへの注目を集める役目を果たした。



サポーターズクラブのミーティング風景
あいちトリエンナーレのファンクラブ的存在、サポーターズクラブも成功に導いた功労者。アートをもっと身近にするためのイベントを企画・運営するなど、鑑賞者にとどまらない多彩な活動でトリエンナーレを盛り上げた。なお、第2回開催に向けて2011年1月から早くも再始動しており、活動の輪は着実に拡大している。



まちなかを走るペロタクシー
アート性にあふれたインパクトのあるラッピングを施したペロタクシーは主要4会場をつなぎ、トリエンナーレのチケットを持っていれば無料で乗車できた。



トリエンナーレスクールの模様
あいちトリエンナーレ・サポーターズクラブ主催によるトリエンナーレスクールは、開幕前から回を重ねてきた名物イベント。様々な立場でアートを支える人々を講師として迎え、受講者に各フィールドの現状を学ぶ機会や、交流の場を提供した。

572,023人からの、喝采!



子ども・学生の声

- 美術館はいつも疲れるけどトリエンナーレは疲れなかった。楽しかった。
- 自分でも作ってみたいと思った。
- 芸術に興味になかったけど、トリエンナーレに来てすごく興味が沸いた。
- いつも本で見る作品より、ここで見た作品は迫力があって面白かった。
- とても楽しかった。お母さんに作品を見せたいです。(キッズトリエンナーレを体験して)
- とてもきれいな作品ができて、いろいろなアイデアで楽しかった。
- 最初はこんなこと本当にやっていいの?と思ったけど、やってみると、すごく楽しかった。(キッズトリエンナーレを体験して)

協力してくださったみなさんの声

- アートが気運を高め、長者町の活性化ができた。町の方々が前向きになった。
- 芸術を楽しむ人々がたくさんいて、名古屋のインテリジェンスを感じました。アートが好き=おしゃれということも感じました。
- 街づくりの方向性がわかったのではと思う。
- 1つの会場ではなく、いくつかの会場に分かれていたことで、街全体で取り組んでいる様子が伝わってきた。
- 美術に関心のある人々が、演劇に興味を持つ良いきっかけになったと思います。ヴィジュアル・アーツとパフォーマンス・アーツが、同じ芸術分野として繋がりが感じました。
- ガイドツアーを担当しましたがとても満足しています。人と人のコミュニケーションが出来たこと、アートそのものについても、とても楽しむことが出来ました。
- 3年後のあいちトリエンナーレでも、ボランティア活動にまた申し込みもしています。この事業を継続して、もっと、さらにおもしろいものにして欲しいです。
- トリエンナーレですので2013年も必ず開催してください。その際にもぜひ参加します。
- 不況といわれる最中に、名古屋発信で何か「動き」を感じることが出来ました。次回も是非よろしくお願ひします。
- 楽しいイベントでした。継続的に成長していくのを楽しみしています。定着を願っております。

And More...

一般鑑賞者の声

- 芸術が特別なものではなく、身近な存在であることが、より多くの人に感じてもらうと思います。
- 美術に関心がない人でも興味がわくと思います。
- あいちトリエンナーレを通して、栄・伏見の魅力を感ぜるとともにアーティストからエネルギーをもらった。愛知県の人々からも皆明るく、ハッピーを分けてもらった気がする。
- 名古屋は観光に乏しいと言われるが、このイベントは自信を持って紹介できる。
- 伏見の間屋街で働く人々の中にも、アートに対する関心の高い人もいて、協力的であることが分かった。「芸術に関心のある人々から、協力的であることから、日常的に何らかの芸術に触れることの大切さを感じた。
- 難しいと思っていた現代アートでしたが、たまたま参加したガイドツアーでよく理解できて、楽しむことが出来てよかったです。子供も外国の先端のアート作品に接する機会をもらえてとてもいい経験になりました。ぜひ3年後も開催して欲しいです。あいちトリエンナーレありがとう。
- とにかく続けることが大事だと思います。芸術、文化への投資は、真っ先に削られがちですが、それが有効に使われれば非常に大きな効果を生みます。知恵を出し合い、毎回見る人を驚かせる「あいちトリエンナーレ」を開いてください。3回目には都市の文化になります。
- ボランティアで活躍されている方々の素晴らしい対応に、本当に感謝。次回のトリエンナーレでは自分も何か協力してみたい。
- 一列目でみさせていたしましたが、アンドロイドがまばたきしてこちらを見ていると本当の人間に見つめられている気がしました。平田さんと石黒先生にはロボット演劇の最先端を走り続けて、また愛知にもって来てほしいです。
- (平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学&ATR知能ロボティクス研究所)によるアンドロイド演劇(さようなら)に対して)
- ものすごいエネルギーを感じた。クラシックがルノアールとかだったら、この演技はピカソのようなデフォルメの中に深い何かがあるような不思議な世界を思わせるものだった。
- (ニプロール(THIS IS WEATHER NEWS)に対して)
- 外ロボリックオペラで観た時と、勝るとも劣らないすばらしい舞台で感動しました。衣裳、装置、合唱、ソングもなかなか素晴らしい。日本では滅多に上演されない演目だけに希少価値で、新幹線代を使ってまで来てよかったです。
- (オペラ(ホフマン物語)に対して)



メデイアが追い掛けたトリエンナーレ旋風

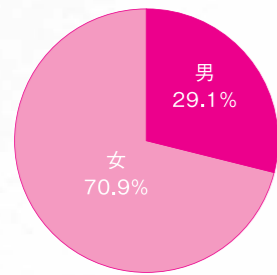


芸術都市を県内外にアピール
次回への期待高く

DATA

国際美術展への来場者の状況

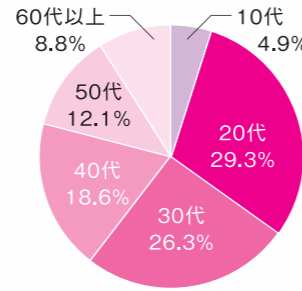
来場者の男女比



女性が7割

男女別では、女性が7割、男性が3割となっている。

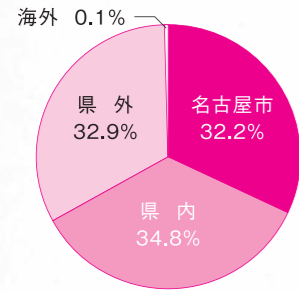
年齢別来場者



30代以下が約6割

子どもを除く一般来場者の年齢別では、10代~30代の若い世代が約6割を占めている。

地域別来場者



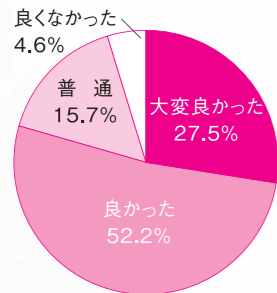
来場者の1/3は県外から推計20万人も

来場者の地域別割合は、県外33%、名古屋市内32%、名古屋市以外の県内35%と、県内外から来場し、県外からは、ほぼ全都道府県からの来場があり、そのうち50%は、首都圏・京阪神からであった。



一般来場者アンケート結果

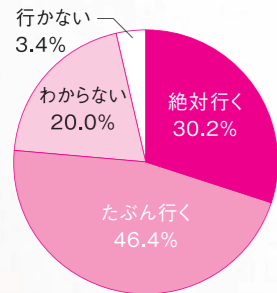
全体の感想



良かった 79.7%

一般来場者の79.7%が「大変良かった」または「良かった」と回答している。

次回トリエンナーレに行きたいか

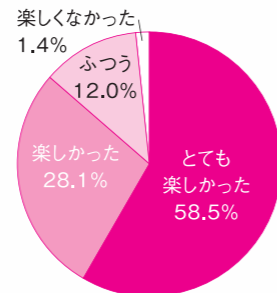


また来たい 76.6%

一般来場者の76.6%が次回のトリエンナーレにも、「絶対行く」または「たぶん行く」と回答している。

子ども(中学生以下)アンケート結果

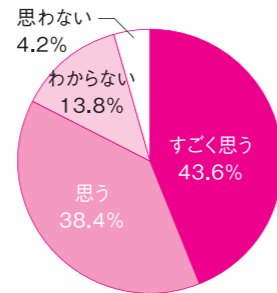
今日は楽しかったか



楽しかった 86.6%

子ども(中学生以下)の86.6%が「とても楽しかった」または「楽しかった」と回答している。

またトリエンナーレに来たり、作品を見たりしたいか



また来たい 82.0%

子ども(中学生以下)の82%が次回のトリエンナーレ来て、作品を見たいと「すごく思う」または「思う」と回答している。

数字で見るあいちトリエンナーレ2010

アーティスト数

131組

「都市の祝祭 Arts and Cities」をテーマに、24の国と地域から131組のアーティストが参加し、現代美術、ダンスや演劇等のパフォーマンス・アーツやオペラなどの世界最先端の現代アートを紹介した。

最終来場者数

572,023人

最終来場者数は、57万2千人と当初に想定した30万人を大幅に超えた。

経済波及効果

約78億円

あいちトリエンナーレ2010の開催により、愛知県内において約78億円の経済波及効果があったと考えられる。

パブリシティ効果

47億円以上

マスメディアを通じて発信された情報は、新聞873件、テレビ176件、ラジオ12件、雑誌等222件であった。これらのパブリシティ効果(広告費換算)は47億円以上にのぼった。

来場者に占める中学生以下の割合

14.3%

国際美術展の主要4会場及び「キッズトリエンナーレ」では、来場者に占める中学生以下の割合が14.3%と非常に高かった。

展示面積

18,127㎡

展示面積は通常の企画展の展示スペースの10倍を超える18,127㎡を使用して展示。

1日の最多来場者数

34,511人

会期中で来場者が最も多かったのはspectra[nagoya]を開催した9月25日(土)で、34,511人の来場があった。1日当たりの平均来場者数は約8千人。

ボランティア登録者数

1,289人

トリエンナーレの会場運営、ガイドツアー、アーティストサポートなどの業務に従事するボランティアを広く一般から募集。登録者数は、1,289人にのぼった。

サポーターズクラブ登録者数

5,373人

トリエンナーレを応援し、盛り上げていくためのサポーターを募集したところ、トリエンナーレの開幕時までに5,373人の登録があった。

キッズトリエンナーレ参加者数

22,328人

国内初の取組であるキッズトリエンナーレには22,328人の参加者があり、盛況であった。

トリエンナーレを鑑賞した学校数

124校

学校行事等としてトリエンナーレを鑑賞したのは、124校であり、多くの子どもたちが芸術に触れる機会となった。

企業・団体・個人の支援件数

408件

企業・団体・個人から「協賛」、「協力」、「会場提供」、「有償広告掲載」の支援を計408件いただくことができた。

県内コンビニエンスストアでのチラシ配置協力店舗数

延べ5,026店舗

県内コンビニエンスストアにて、ポスター、チラシを配置した。チラシは延べ5,026店舗、111,660部配置し、ポスターは延べ3,282店舗に1枚ずつ掲示した。

交通広告数

209駅

交通広告は、名古屋市営地下鉄、市バス、JR、名鉄、リニモなどの209駅において1,180枚のポスター、13,000部のチラシを配置。また、地下鉄全線の車両内に7,278枚のポスターを掲示した。

公式ホームページへのアクセス数

447,128セッション

105の国と地域から447,128件のアクセスがあった。(8月21日~10月31日)
*Google Analyticsによるセッション数